東海スポーツ傷害研究会会誌：Vol.35（Dec.2017）

陳旧性アキレス腱断裂および再断裂に対し 自家ハムストリング腱を用いて再建術を施行した３例の治療経験

鈴鹿回生病院　整形外科
中空繁登　千賀佳幸　植村　剛　福田亜紀　加藤　公
三重大学医学部　スポーツ整形外科
西村明展

【はじめに】

アキレス腱の陳旧性断裂および再断裂例では，時に端端縫合が難しく，何らかの補強が必要になることがある．このような症例に，ハムストリング腱を用いて再建術を行った．

【症例】

2013 ～ 16 年に当院でハムストリング腱を用いてアキレス腱再建を行った３例３足．平均は 65 歳で全例男性，陳旧性断裂２例と，陳旧性断裂にて他院の術後に再断裂を来たした症例が１例であった．受傷から再建術まで平均６か月，術後観察期間は平均 19 か月であった．アキレス腱欠損部の補強に半腱様筋（ST）を用いた．近位・遠位の正常アキレス腱部にSTを通し，中央で交差させ，残った ST 両断端は再建アキレス腱を覆うように縫合した．この際，近位・遠位断端の瘢痕組織はできるだけ温存した．検討項目は術中・術後合併症，JSSF ankle hindfoot scale, 両脚つま先立ち可能時期とした．

【結果】

当院が初回手術となった２例では瘢痕組織を温存できたが，他院で縫合術を施行された１例は瘢痕組織が切除されており腱成分のみでの縫合となった．術中・術後合併症はなく，瘢痕組織温存の２例では両脚つま先立ちは４か月，3.5 か月で可能，JSSF Scale も 98 点，100 点と改善したが，瘢痕組織切除例では両脚つま先立ちに 10 か月を要し，JSSF Scale も 90 点であった．

【考察】

ハムストリング腱を用いた再建術は，患部外に侵襲が加わる欠点はあるが，機能障害は少なく，大きな欠損部にも対応できる利点がある．また，アキレス腱断裂の断端間は瘢痕組織で埋まった後，経時的に腱組織に再生するとされ，陳旧性断裂において腱断端間組織を用いる方法が報告されている．自験例でも，瘢痕組織を温存利用した２例では術後１年の MRI でアキレス腱は均一な低信号で肥厚し，良好な腱修復像がみられた．瘢痕組織切除例でも術後 13 か月でアキレス腱の肥厚がみられたが，腱内高信号域が残存していた．腱修復はあるが治癒に時間を要するため，瘢痕組織は温存すべきと考えた．

Key words：アキレス腱（Achilles tendon），陳旧性断裂（Chronic rupture），ハムストリング（Hamstring）